自己形成に影響を及ぼす諸要因(2)

— 大学生を対象として —

高井 範子

(大阪行岡医療大学)

キーワード：自己形成, 要因, 大学生

Factors Influencing Self-Formation : Focusing on University Students

Noriko Takai

(Osaka Yukioka College of Health Science)

key words : self-formation, factors, university students

【目的】 「今の自分」というものが形成される過程においてはさまざまな要因が影響を及ぼしている。高井 (2015) は、中年期を対象とした自由記述分析を行った結果、割合の多かった上位4要因として、1. 人間関係(26.2%), 2. 育った家庭環境・親の影響(22.1%), 3. 社会人経験(12.7%), 4. 学校生活(10.3%)を報告している。本研究においては大学生を対象とした自由記述分析によって自己形成に影響を及ぼす要因を検討することにする。

【方法】 質問紙は近畿圏を中心に、中部・関東、中京、中国・四国、九州地域に配布した。自由記述の回答者数は、大学生合計225名(男子122名、女子103名)であった。質問紙の自由記述欄で、「今の自分」というもの(考え方や生き方、自己成長、その他)の形成には、主にどのようなことの影響が大きいかと感じているか、について尋ねた。複数回答を含む記述内容についてKJ法(川喜田, 1970)による分類を行った。

【結果と考察】 分類に際して、多くが人間関係や経験が入交じるものであるが、中年期における分析同様、出来る限り回答者の記述の表現に沿う形でカテゴリに分類した。表1に示されるように、「今の自分」に影響を及ぼしていると感じているものとして、大学生の男女合計においては中年期同様、「1. 人間関係」の割合が最も多かった。友人や教師、自己成長につながる他者との出会い

の生きる姿などによる影響が大きかったとしている。4番目の要因は、「4. 人生経験・困難克服・その他の経験」に分類されるものであった。“今までの全ての経験”といった記述が多かったが、辛い体験を克服したことなども本要因の主な内容である。趣味経験や海外生活経験なども含まれる。

男女の差異としては、男子の割合が最も多かったのが「人間関係」であったが、女子の割合が最も多かったのは「親の影響」であった。特に母親の影響が強いとする回答が多くみられた。また、親との関係性においては良好な関係性に基づく内容だけでなく、家庭における疎外感や、親の価値観と自己の価値観の相違からくる混乱など、ネガティブな内容の記述もみられた。中年期においても、女性(25.6%)の方が男性(13.9%)よりも「親の影響」が強いとする割合が多かったが、密着性が高いとされる「母-息子」関係とは異質な「母-娘」関係の関係性が娘の自己形成に与える影響が大きいたことが示唆された。

また、「人間関係」において、女子にのみ「恋人による影響」が挙げられていた。彼氏との出会いによって、“こんな自分でも認めてくれる人がいるんだ、って思えて自分に自信が持てるようになった”、“彼氏と出会って性格が drastically 変わった”といった記述がみられた。一方、男子にのみ、“周りから格好いいと思われるような生き方をしたいという考えから今の自分がある”といった記述がみられた。男子は他者から良い評価を得ることを意識した野心的自己向上的な姿勢が自己形成につながっていく側面もあり、女子は恋人という親密な関係にある他者によって受容され、肯定的評価を受けることによって、否定的自己評価が肯定的自己評価に容れられ、新たな自己形成につながる側面もあることが窺えた。

中年期との比較における大学生の特徴としては、趣味やメディアが挙げられる。人生経験が多くなる中年期では、社会人経験や結婚生活が要因に含まれてくるが、大学生では「4. 人生経験」に含めた「趣味」が自己形成に影響を与えたとする回答が特徴的であった。“音楽”や“サブカルチャーへの興味”、“バーチャルと呼ばれるネットワークへの参加が私の感じる現実感を教えてくれた”といった記述がみられた。また、「6. メディア」に分類した「各種のメディア」や「テレビの影響」，“インターネット”、“経済ニュースを見て今の社会の厳しさを知った”といった記述も青年期に特徴的であった。

青年期の課題はアイデンティティとされるが(Erikson, 1959)、青年期は揺らぎながら自己を問いつつ時期であろう。青年期は他者の考え方や視点を内在化して自己成長につなげたり、自己洞察や内省の指標にしながら、さまざまな人間関係やあらゆる経験を通して自己理解や思索を深めていく時期である様子が窺えた。若い時期ほどより多くの他者と積極的に出会い、多くの経験を積むことが自己形成に大きく寄与することが示唆された。【引用文献】高井範子 2015 日本発達心理学会第26回大会発表論文集, 143.

表1 自己形成に影響を及ぼす諸要因

	合計	合計(%)	男子	男子(%)	女子	女子(%)
1.人間関係	95	30.4	47	34.1	48	27.6
2.学校生活	81	26.0	39	28.3	42	24.1
3.育った家庭環境・親の影響	77	24.7	25	18.1	52	29.9
4.人生経験・困難克服・その他の経験	33	10.6	18	13.0	15	8.6
5.書物	9	2.9	3	2.2	6	3.4
6.メディア	9	2.9	4	2.9	5	2.9
7.宗教	4	1.3	1	0.7	3	1.7
8.病気・死	1	0.3	0	0.0	1	0.6
9.その他	3	1.0	1	0.7	2	1.2
合 計	312	100.1	138	100.0	174	100.0

が今の自分を形成していると回答している。友人の考え方による影響や、“夢を持っている教師から使命感を得た”とする回答もみられた。2番目に割合が多かったのは、「2. 学校生活」であった。学校生活には、学校教育やクラブ活動経験、受験や転校などが含まれる。学校における授業や指導など、学校生活全般の経験が挙げられていた。また、中学や高校におけるクラブ活動によって忍耐力が養われたり、部員との関係を通してリーダーとして何が必要なのかを体得したり、また、部活に全力で打ち込んだ経験などが今の自分をつくっていると回答していた。苦楽を共にしたクラブ活動での人間関係は、それ以外での友人関係よりもより深い関係を構築でき、そのことによって受けた影響も大きいとする回答もみられた。3番目に多かったのは、「3. 育った環境・親の影響」であった。親の考え方・価値観、親との関係性、育て方(躾)、親